
ウルトラマンゼロ×DOG DAYS 逆襲のカイザーベリアル

無山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンゼロ×DOG DAYS 逆襲のカイザーベリアル

【Nコード】

N0991V

【作者名】

無山

【あらすじ】

シンクがフロニヤルドに召喚されてから数日、不吉な星詠みの運命を変えるためにレオンミシエリが仕掛けた宝剣を賭けた戦興業。そこへ別の時空からの来訪者が降り立とうとしていた……。危機に陥るフロニヤルドを救うため、光を受け継ぐ勇者、ウルトラマンゼロが立ち向かう！

第1話 舞い降りた悪魔（前書き）

どうもはじめまして。

ここではまだ新参者ですが書かせていただきます。

どうか温かい目で見てください。

前々から考えていたこの作品、ほぼ自己満足で書いているのでご注意を…

この話はDOG DAYSの9話のラストから始まります。

ちよつとうる覚えなので、間違っている箇所が結構あると思います
が、その辺はご容赦下さい（汗

あとこれはクロスオーバーですので、そういうのが嫌な方は申し訳
ないですが、お戻り下さい…

第1話 舞い降りた悪魔

黒雲が空を覆い、辺りのフロニヤカが下がっていく。

そんな中、グラナの天空武闘台の上に立つ人影が二つあった。

一人はガレット獅子団領の姫であり領主のレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ、もう一人は 近衛メイドのルージュであった。

レオは、ここ最近不安な星詠みのせいでほとんど寝ていないため、つい立つたまま寝むってしまい、ある夢を見た。

そこに映されたビジョンには、レオにとって姉妹のような関係であった隣国の姫、ミルヒオーレ・F・ビスコッティの姿が映っていた。ミルヒは、瞳から涙を流していた。

(泣くな、ミルヒ……お前は……)

そう心の中で呼びかけると、次の瞬間、戦慄が駆け抜けた。

ミルヒの目の前に漆黒の人影が現われ、鋭い爪でミルヒを引き裂いたのだ。

血を流して倒れるミルヒ……そしてその前に立つ黒い影は上を向き

……

『フフフ……フハハハハハハハハハハ！』

雄叫びにも似た恐ろしい笑い声を上げた……

「ハッ！」

恐怖のあまりレオは目を覚ました。

周りを見渡すと、場所は黒雲に覆われたグラナの天空武闘台で、後

るからレオを心配したルージュが駆け寄ってきた。

「レオ様、どうかなさいましたか？」

「い、いや……大丈夫だ、問題ない……」

無理に平静を装うレオに、ルージュは怪訝な表情を浮かべるが、すぐに後ろへ下がった。

そうしていると、武闘台のエレベーターがレオ達のいる最上階へと上がってきた。

「む？ 来たか……」

レオはエレベーターの方へ向きを変えた。

そうだ、宝剣を手に入れさえすれば運命は変えられる。それが今のレオの心を支えていた。

レオは先ほどの武闘台のゲートキーパー達を撃破してやって来たビスコツティの『勇者』と『親衛隊長』に二対一の決闘を申し込んでいた。

そうして、二人が来るのをここで待っていたのだ。

だが、上がってきたエレベーターに乗っていた人物の姿を見て、レオは驚いて思わず声を上げた。

「なっ！」

「……」

エレベーターに乗って来たのは、なんとミルヒオーレ・F・ビスコツティその人であったのだ。

レオは本来ならば来るはずがない人物の登場に驚き、同時に自分が

見た夢が現実のものになろうとしていることに愕然とした。？
そんなレオの心を察したのか、ルージユがミルヒの持つ宝剣エクセ
リードを奪うため奇襲を仕掛けるが、その際にエクセリードが一部
覚醒し、ルージユを退けた。

そしてミルヒはレオに問いかける。
最近のレオの「心変わり」のことを……。
それを黙って聞くレオだったが……

「レオ様は、そんなに私の事が嫌いになったのですか!？」

「……………ッ!！」

涙ながらに訴えるミルヒに、真実を伝えられないレオは言葉に詰ま
っていた。

……………とその時だった。

バリバリバリバリ!!

雷鳴が轟き、黒雲の中から赤黒い球体がゆっくりと降りてきた。
その球体の表面は、まるで血管の中を赤血球が循環するように、赤
く小さな粒状のものがせわしく蠢いていた。
そしてその中には、不気味な人型の影があった。
胎児のように体を丸めた格好で、球体の中で眠っているかのように
あった。

「あれは……………ミルヒ、下がっておれ」

危険を察知したレオはミルヒに自分の後ろに来るよう促した。

「えっ？ あ、はい……」

急にレオから声をかけられ驚くミルヒだったが、その言葉に従い、レオの後ろについた。

レオは、ミルヒを守るようにその前に立ち、自らの武器である神剣『グランヴェール』を構えた。

「レオ様、あれは……？」

「わからん……。じゃが、どうやら魔物かもしれん」

「魔物……」

不安になるミルヒに「大丈夫だ」と言うように顔を向けるレオ、しかし、彼女も自分の悪い予感がだんだんと現実味を帯びていくことに不安を感じていた。

球体が武闘台に近づくにつれて、レオの心臓の鼓動も高鳴りつつあった。

「レオ様……」

二人を心配したルージユが後ろから歩いて来た。

レオはルージユに、

「無理はするな」

とだけ言うと、ルージユは黙って引き下がった。

しばらくすると、球体は武闘台の床に降り立った。

同時に、球体は煙のようになって消え、後には異形の『ヒトガタ』

が残った。

体は大きく、2メートルはあるだろうか。体格は非常に筋肉質で、体色は黒を主としてそれに赤い模様が入ったようなもので、目は釣り上がっていてかなり恐ろしい顔をしていた。そして……

「ククク……ようやく着いたようだな……」

黒きヒトガタはそう言うと、ゆっくりと立ち上がりレオ達の方を向いた。

「ほう……変わった人種の星か……これはまた面白い」

「貴様、一体何者だ！」

威圧するようにレオが叫ぶと、それはフツツと笑い混じりに言った。

「オレか？ 俺はそう、俺の名はベリアル……ウルトラマンベリアル！ ……いや、その名前ももう違うな。今の俺は……」

その途端、ベリアルと名乗った者に向かって雷が落ちた。

落雷の眩しさに、レオとミルヒは手で顔を覆った。

次の瞬間二人が見たものは、先ほどとは違う、赤いマントを羽織った姿のベリアルであった。

「今の俺の名は、この世界を支配する帝王………カイザーベリアルだ！」

カイザーベリアルはそう言い放つと、雄叫びのような高笑いを上げた。

第1話 舞い降りた悪魔（後書き）

何故この組み合わせでやろうと思ったのか……理由は簡単で……
ゼロとシンクの声優が同じ宮野真守さんだったからです！

…はい、ほんとそんな理由です^^^；

あとアイアロンとゴドウィンの声も同じ若本さんだったのもありますw

ほぼ自己満足な内容ですが、今後ともよろしく願います。
コメント、アドバイスなどもどんどん受けつけますので。

第2話 激闘！ 闇下VS陛下（前書き）

そういえば、何で魔獣をベリアルにしたかまだ書いてませんでした。なんというか、あの球体に入って降りて来る魔獣がベリアルに見えてしまったんです^^；

そんな単純な理由で9話目のラストから始めたわけです（汗

あと今回から残酷描写も入ってくるので、苦手な方はご注意ください
い。

第2話 激闘！ 闇下VS陛下

グラナの武闘台に降り立ったカイザーベリアル。

彼は復活の雄叫びのごとき高笑いを上げた後、レオやミルヒには目もくれず、辺りを見渡し始めた。

「どうやら自分と周りの大きさを比べて、今の自分の身長を測っているようだ。」

「あーあ、だいぶ縮んじまったようだな」

ベリアルは俯いて、しょんぼりとしたポーズになった。

それもそのはず、ベリアルの本来の身長はウルトラマンであるため55メートルという超巨体なのだ。

それからすれば現在の2メートルという身長は、人間にしてみればかなり大きめの身長であるが、ベリアルにとってはアリンコ程度の大きさなのだ。

「ま、しょうがねえか。それよりも……」

ベリアルはレオとミルヒの方へ向き直る。

「少し遊んでくれよ。復活したばかりで体がなまってないか心配だな」

そう言うとベリアルは、両手を自分の顔の前でクロスさせた。

すると両手の爪が赤く発光し、元の長さの二倍ほどにまで伸びた。

「……………そうか、貴様がミルヒを……………」

ベリアルベリアルの鋭い爪を見たレオは、自分の夢に現われた黒い人影を思い出した。

と同時に、ミルヒミルヒがそれによって殺されてしまう事が頭の中をよぎり、レオは焦りを感じた。

「ルージュルージュ、早くミルヒを安全な場所へ連れて行け！」

夢の内容が現実化することを恐れたレオは、無意識のうちに声を荒げていた。

「は、はい！」

レオの命令を受け、ルージュルージュは慌ててミルヒの元へ駆け寄るとその手を取り、

「さあ、こちらへ」

と言って、レオとベリアルベリアルからかなり離れた所まで連れて行った。これでよしと確信したのか、レオはベリアルベリアルに対してグランヴェールグランヴェールを構え、戦闘態勢に入った。

「いくぞ、化け物！」

「ククク………楽しませてくれそうだな」

復活して早々、さっそく強そうな相手に会えた事にベリアルベリアルは喜んだ。

「それじゃあ、いくぜ！」

先制とばかりに飛びかかるベリアル。

右手の爪を突き出し、レオの心臓部を狙う。

対するレオは、ベリアルの爪が体に当たる寸前で後方に飛び退き、カウンターとしてグランヴェールを振るった。

ベリアルは右手を大きく前に出しているため、右手が使えない。そのため瞬間的に左手で防ごうとしたが、急であつたためにあまり力が入らず、勢いで負けて弾き飛ばされてしまった。

「ぐおツ！ ……？へへへ、やるじゃねえか」

レオの攻撃は確かに効いていたが、ベリアルはまだ余裕のそぶりを見せる。

しかしこれによってレオは、ベリアルに対しての攻略法を見つけたようだった。

「おいベリアル、もう一度だ、もう一度チャンスをやろう。全力でかかってこい！」

レオは、わざと誘うように言った。

同時に戦いの構えも解き、無防備な状態となった。

「レオ様！」

後ろからミルヒの心配する声が聞こえたが、あえて聞き流した。

勝負は一瞬、少しでも集中力が途切れれば、自分の方がやられてしまう。

そのため、レオはあらゆる雑念を払ったのだった。

「フン、言われなくともそうしてやるぜ！」

案の定ベリアルは誘いに乗り、さつきと同様、右手を大きく突き出しながら飛びかかって来た。

(また同じ戦法だと？　じゃが、その方が確実に仕留められる！)

ベリアルの先ほどと全く同じ攻撃の仕方を、レオはおかしく感じたが、逆に好都合と捉えて武器を構えた。

迫ってくるベリアルの鋭い爪を、今度は攻撃の当たるギリギリのところ屈んで避け、ベリアルの懐に潜り込んだ。

驚いたベリアルは慌てて反撃を試みるが、レオはすでに、ベリアルの腹部をグランヴェールで斬りつけていた。

「グアアアアアアアアアア！」

激しい痛みが腹の辺りから巻き起こり、ベリアルは悲鳴を上げてうずくまった。

「て、てめえ……！」

ベリアルは傷口を手でおさえながら、怒り狂う眼差しでレオを睨む。斬られた傷口からは、シユウシユウと白い煙が上がっていた。

(よし、これで……)

レオは、持てる力の全てを賭け、ベリアルに向かっていき、

「とどめだアアアッ！」

未だうずくまっていたままのベリアルにグランヴェールを振りかざした。

「……クククッ」

その時だった、突然ベリアルが立ち上がり、レオに向かって右手を素早く突き出してきたのだ。

「なっ！」

レオはすぐに身をかわそうとしたが、大斧を振りかざした状態のため、避けることが出来なかった。

レオの左肩に、ベリアルの爪が深々と突き刺さる。

「うぐっ！」

痛みに顔を歪めるレオ。

と同時に、レオの衣服の左肩の部分に赤黒い染みができ始めた。

「俺はこれを見ていたんだよ。お前が自分から仕掛けて来て、一瞬でも隙を見せるこの瞬間をなァ！」

「き……貴様、まさか最初から……そ、そこまで計算していたというのか……」

「まあ、腹をここまでザツクリと斬られたのは予想外だったがな」

まだ傷が痛むようで、ベリアルは左手で傷口をおさえていた。

「……このお……」

レオは尚もグランヴェールを持つ手に力を込めるが、何故か力が入らなくなっていた。

まさかと思い、ベリアルルの爪が食い込んでいる左肩を見ると、突き刺さったベリアルルの爪から、何か赤いものが傷口に流し込まれていた。

「お前も俺の部下にしてやる。ハハハハハハハ！」

歓喜の笑い声を上げるベリアルル。

ベリアルルはレオを洗脳するため、傷口から『ベリアルルウイルス』を流し込んでいたのだ。

(……………すまん、ミルヒ……………守ってやれなく……………て……………)

ベリアルルウイルスに心を侵され、レオの意識はだんだんと薄れていった。

第3話 ?勇者参上!

その頃、同じくグラナの天空武闘台の壁で……

「エクレーー!」

「おう!」

壁をよじ登る二人組がいた。

上をいく金髪の少年の名は『シンク・イズミ』。地球からこのフロニヤルドへと召喚された勇者だ。

そしてもう一人、シンクより少し下の方を登っている、緑の髪の垂れた犬耳の少女がいた。

こちらは『エクレール・マルティノッジ』。まだ幼いが、かなりの実力者で、ビスコッティの親衛隊長を任されている。

何故二人が壁を登っているのかというと、今から少し前、レオのところへは自分が行くとミルヒが言い出し、エレベーターの所で、

「皆さんはここで待っていて下さい」

と言ったので、シンクは行くのを諦めたように見えたが、その後武闘台の入り口まで戻り、何を思ったか壁をよじり始めたのだ。

シンクが言うには、

「姫様は、あそこから先にはついて来るなって言ったけど、ここからなら問題ないよね?」

とのことであった。

そんなシンクの屁理屈に、エクレールは最初呆れていたが、自分もミルヒの事が心配なため、結局はシンクと一緒に壁を登っていったのだった。

やっとの思いで壁を登りきった二人の前に、衝撃的な光景が飛び込んできた。

その光景とは、赤いマントを羽織った黒い怪人と、その前に跪くレオ、そして自分達の近くで、恐怖の表情で声も出せずにいるミルヒとルージユの姿であった。

「姫様！」

シンクは急いでミルヒの所まで走って行った。

「お、おい勇者！」

エクレールも、慌ててその後に続いた。

「シンク、エクレ……」

シンク達が駆けつけると、ミルヒは目に涙をためていた。そして、レオと黒い怪人の方を指差し、

「レオ様が、レオ様が……」

と言って、目にためていた涙を零した。

シンクとエクレがその指差す方を見ると、それに気付いた黒い怪人が、

「なんだお前らは？ こいつの仲間か？」

と言つて、自分の足元に跪いているレオを指差した。
それに対してシンクは、

「お前は、一体何者だ!？」

と、怒りを織り交ぜて質問をぶつけた。

それを聞いた黒い怪人は、心の中で「さつきも聞いたな？」と思いつつ、それに答えた。

「俺か？ ククク……よく覚えておけ、俺の名を。俺はこの宇宙の全てを支配する者、カイザーベリアルだ!！」

黒い怪人……カイザーベリアルは、雄々しく名乗りを上げた後、シンクに言った。

「お前の名前も聞いておこうか」

「僕は、シンク・イズミ！ ビスコツティの勇者だ!！」

「ほう、そうか勇者か……。そしてシンク・イズミ、確かに覚えたぞ。お前の声を聞いてると、嫌な奴を思い出すからな……」

ベリアルは軽く舌打ちした。
すると、

「それよりも貴様、一体レオ様に何をした!！」

今度はエクレールが、怒りをむき出しにして言った。

「何をしたのかだと？ 簡単なことだ。こいつが強いから俺のものにしてやった……それだけだ。……しかし、こいつもレオっていうのか？ 全く、嫌な奴を二人も思い出しちまったぜ」

淡々と語るベリアルに、エクレールはさらに怒りを燃やした。

「ふざけるな！ レオ様が、レオ様がそんな……」

エクレールが次に出す言葉に詰まっていると、先にベリアルが言うてきた。

「なら、証拠を見せてやる。なあ、レオ？」

ベリアルに自分の名を呼ばれ、レオはゆっくりと立ち上がった。そして、シンク達の方へと顔を向けた。

「なっ！？」

「まさか！？ そんな……」

それを見たシンクとエクレールは呆然とした。

レオの心はベリアルの闇によって染められ、瞳が不気味に赤く光っていた。

「見ての通り、こいつはもう俺のものだ」

「くっ………ベリアル！」

シンクは、怒りを込めて叫ぶと、右手にしている今は指輪となっている神剣、『パラディオン』を棒状に変化させ、ベリアルに向かって行った。

「うおおおおおおっ！」

「……………フッ」

棒に変化させたパラディオンを手に向かって来るシンクに、ベリアルは何もしようとしなかった。

そして、ベリアルにパラディオンが振り下ろされた……………だが、

ガキイイイーン！

「えっ!?!」

「ククククク……………」

シンクの攻撃がベリアルに命中する瞬間、ベリアルの際にいたレオが、グランヴェールでそれを受け止めた。棒状のパラディオンと大斧のグランヴェールがぶつかり合って火花を散らし、シンクとレオは互いに退いた。

「言ったはずだぞ、こいつはもう俺の部下だな。頼もしい部下が出来たぜ、ハハハハハハ！」

「クッ……………」

「勇者！ まだ諦めるのは早いぞ！」

膝をついてうなだれるシンクの隣に、エクレールが駆けて来た。

「エクレー……」

「私を忘れるな。相手はレオ様も合わせて二人だが、こちらもお前と私で二人だ。二対二なら、こちらにも勝てる可能性がある」

そう言って、エクレールはシンクに手を差し伸べた。

「……そうか、そうだね。分かったよ、エクレー！」

シンクは、覚悟を決め、エクレールの差し出した手を取り立ち上がった。

そして、もう一度パラディオンを構え、ベリアルに向けて叫んだ。

「いくぞ、ベリアル!!」

「フン、面白い。二人まとめて俺の僕にしてやる！」

ベリアルは、その鋭い爪でシンク達を指差した。

雷鳴轟くグラナの天空武闘台で、今まさに死闘が始まるうとしていた。

第3話 ？勇者参上！（後書き）

ようやく主人公の登場となりました^^^；
次回はついにゼロも登場する予定です。

第4話 特訓！ウルティメイトフォースゼロ

その頃、フロニヤルドのある宇宙とはまた別の宇宙で……

ここは、M78星雲のとある無人の惑星。

空は青く、気候も穏やかだが、水不足のために星全体が砂漠化してしまい、生物が住めなくなってしまうた惑星である。ここに、五人の超人が集まっていた。

「よし、では始めるぞ」

そう言ったのは、胸から肩までが銀色の鎧で覆われた赤い巨人、『ウルトラセブン』だ。

セブンは、自分の息子『ウルトラマンゼロ』と、その仲間達、『ウルティメイトフォースゼロ』の面々をこの星に集め、直々に特訓をしようとしていた。

「おう、こっちはいつでもいいぜ！」

そう答えたのは、赤と青のカラーリングの巨人、彼こそが、ウルトラセブンの息子、ウルトラマンゼロである。

「しっかり、まさかゼロの親父さんから直接指導してもらえんな」

「せっかくの機会ですし、しっかりとやりましょう」

「ああ、私はロボットだが、だからこそプログラムにしっかりと戦闘データを入れておきたい」

ゼロの後から、ウルティメイトフォースゼロの面々がそれぞれ自分の意見を述べた。

ゼロの次に言葉を発したのは、燃える炎のような頭部の赤い巨人。

彼の名は『グレンファイヤー』。

炎の戦士の異名を持つ熱血漢だ。

元々は『炎の海賊』の用心棒をしていた。

その次に言ったのは、目にあたる部分が十字架の形をした、緑と銀色のカラーリングの巨人。

彼の名は『ミラーナイト』。

惑星エスメラルダのエスメラルダ王家を守護する使命を持つ、鏡の騎士である。

そして最後に言ったのは、鎧に身を包んだような姿のロボット。

彼の名は『ジャンボット』。

もちろん彼もウルティメイトフォースゼロの一員で、鋼鉄の武人の異名を持つ。

ジャンボットもミラーナイトのようにエスメラルダ王家を守護する存在であり、『ジャンバード』という宇宙船が変形してジャンボットの姿になるのだ。

ウルトラセブンは、一通りウォーミングアップを終えると、ゼロ達に言った。

「それでは、誰が最初に来るんだ？」

「そつだな……おいお前ら、今なら俺より先に相手してもらえんぜ？」

ゼロがそう言うと、グレンファイヤーが、

「んなもん誰だっていいだろ？ ウルトラセブンさんだってそこそこ年だしよ」

と言って、軽く手を振った。

別にグレンに悪気は無かったのだが、それを聞いたセブンはカチンときていた。

「よし、ではグレンファイヤー、君から掛かって来なさい」

「は？ え？ 俺！？」

「私がまだまだ現役だという事を、その身をもって教えてやるう」

セブンは、感情を表に出してはいないが、明らかに怒っていた。

「あーあ、俺は知らねえぞ」

「全くだ、発言に気をつけろ」

ゼロとジャンボットが呆れた様子で言う。

その後ろでは、ミラーナイトも苦笑していた。

「ったく、分かったよ畜生！ やってやるぜ！」

少しヤケクソ気味にグレンファイヤーは言い、セブンの前に立った。

「さあ始めようぜ！ ウルトラセブンさんよ！」

「いやあ、それほどでもないさ……」

と言い、頭を掻く動作をした。

そんなセブンに、感動したジャンボットとミラーナイトは拍手を送った。

すると……

「お、ま、え、ら、なあーッ……!!」

セブンに、一本背負いで見事にノックアウトされたグレンファイヤーが起き上がり、ゼロ達の方へ詰め寄った。

「なんだよお前ら！ 俺一人だけ咬ませ犬かよ！」

大地をガンガン踏み鳴らし、怒りをアピールするグレン。それをゼロ達は、困った様子で見っていた。

「いや、だってなあ……」

「だってじゃねーよ！ お前らだけ和んで、なんか俺だけ損したみてーじゃねえか！」

なだめようとするゼロに、グレンは食ってかかった。

グレンは、もう完全にキレていた。

「わ、分かったよ、分かったから少し落ち着けよグレン……」

怒りが爆発しそうなグレンを、ゼロは必死でなだめた。

その時……

「ぶるあああああああ！」

突然、どこからともなく太い叫び声が聞こえてきた。

「……おい、今変な声しなかったか？」

「ああ……俺達以外には、ここには誰もいないはずなんだが……」

グレンとゼロは、背中合わせになって周囲を警戒した。

他の三人も、それぞれ周囲を見渡して、何かいないかと警戒を強めた。

「ぶるああああああああああ！」

また聞こえた。しかも、さっきより近づいてきている。

「あそこだ！」

ジャンボットが上空を指差して叫んだ。

見ると、空から大きく丸みのある物体が、こちらに向かって飛んできていた。

いや、「落下してくる」と言った方が正しいだろうか。

「あれは……まさか!？」

ミラーナイトが、驚いた様子を見せた。

それとほぼ同時に、謎の物体は地面に落下した。

グレンがセブンから一本背負いを受けた時よりも大きな音が鳴り響き、より大きな砂煙が上がった。

「うおおおっ!?!」

「おおっと!」

物体が落下した場所の近くにいたゼロとグレンは、衝撃でバランスを崩して倒れそうになったが、互いに支え合ってなんとか持ちこたえた。

「二人とも、大丈夫か!?!」

セブン達も、二人のそばへ駆け寄って来た。

「ああ、なんとかな。それよりも親父、これは……」

「うむ、隕石ではなさそうだが……」

物体が落下した場所には、巨大なクレーターが出来ていた。

そしてその真ん中に、あの物体が半分埋まっていた状態であった。

奇妙なその物体からは、かすかに心臓の鼓動のような音さえ感じられた。

第4話 特訓！ウルティメイトフォースゼロ（後書き）

前回はゼロの事だけ言いましたが、みんな出てきましたw
ここから少し、ゼロサイドの話になると思います。

第5話 鋼鉄將軍の復讐

無人の惑星で戦闘の特訓をしていたゼロ達の前に、突如として巨大な物体が空から降ってきた。

ミラーナイトには、それが何かの大体の検討がついているようであった。

「まさかとは思いますが、私に心当たりがありません。私が調べてきましょう」？

ミラーナイトはそう言って、率先してクレーターを下って行き、落下した物体に近づいた。

上では、他のウルティメイトフォーエースゼロの仲間達とウルトラセブンが心配そうに見守っている。

ミラーナイトは、落下してきた物体を間近に見て呟いた。

「……間違いない、だがどういう事だ？」

「その声は……ミラーナイトかア!？」

「!？」

物体から発せられた声に、ミラーナイトは驚いて引き下がった。

「まさか、このような場所で再会するとはな……」

そう言いながら、その物体は起き上がった。

それは、胸の辺りと思われる位置に顔があり、その上には赤い発光体を持つ、鋼鉄のごとく頑丈な肉体を持った怪物であった。

「やはりお前だったか、アイアロン！」

「ほう、覚えていてくれたか。こちらとしてもお前の事は忘れられなかったぞ」

アイアロンと呼ばれたこの怪物は、あのカイザーベリアルの下の一りで、鋼鉄將軍の異名を持つ強者だ。以前、ミラーナイトと戦って倒されたはずだったが……。

「何故だ？ お前はあの時確かに……」

「ああそうだ、俺はあの時確かに死んだ。そう、死んだはずだったが……。だが俺は、今もこうして生きている……。これは事実だ」

平然とそう言うアイアロンに、ミラーナイトは別の疑いを持った。

「それでは、お前を蘇らせたのは誰だ！？」

「知らんなあ……。気がついたときには、俺は生き返っていたのだから。それよりも……」

アイアロンは、ギロリとミラーナイトを睨みつけた。

「せっかくの機会だ。この場でお前に復讐してやる！」

そう言って、アイアロンは両腕をクロスさせた。すると、アイアロンの頭部の発光体が赤く光を帯びた。

「……！」

危険を感じたミラーナイトは、素早く後方に飛び退いた。

「逃がすものか！ アイアロンソニックウー！！」

その掛け声とともに、アイアロンはクロスさせた両腕を強く振って元の位置に戻した。

と同時に、頭部の発光体の輝きが増し、そこから赤い色の衝撃波が放たれた。

その勢いは早く、飛び退いたミラーナイトをも捉えた。

「うわあああああつー！！」

アイアロンソニックをまともに食らったミラーナイトは、その勢いに押され、空高く打ち上げられた。

「ミラーナイト！！」

上空へ打ち上げられたミラーナイトを見たゼロは、すぐさま彼を助けに飛んでいった。

そして、落下中のミラーナイトにうまくタイミングを合わせ、お姫様抱っこの形で受け止めた。

「うつつ……ぜ、ゼロ……」

「大丈夫か？」

「な、なんとか……。それよりも、奴は……」

「ああ、間違いなくアイアロンだった。しかし、なんで生き返った

んだ？」

「それはアイアロン自身にも分からないらしい……。だが、こうなつた以上は……！」

「おう！ やってやるっぜ！」

ゼロは、地上に着地すると、ミラーナイトを降ろし、二人でアイアロンの方へ向かった。

すでにアイアロンはクレーターから這い上がって来ていて、セブン達と対峙していた。

「ぶるああああ！ まとめて吹き飛ばしてやるわ！」

すでに臨戦態勢のアイアロンに、ゼロ達はそれぞれ構えたと、その時だった。

「アイアロンのだんな、大丈夫ですか？」

「またも、どこからともなく声が響いた。」

「今度は気の抜けるような、軽いノリの男の声だった。」

「なんだあ？ まだ何かいやがんのか？」

「グレンが少し苛立ちながら言うと、」

「油断はするな、どんな相手かまだ分からないのだからな」

とジャンボットがたしなめた。

そうしているうちに、空から人型の影が降りてきた。

ドドーン！ と音を立て、砂煙を上げながらそれは降り立った。

「ゲツホゲホ！ あー変なところに砂入った……」

砂煙にむせているらしい。

数秒後、砂煙が消えると、そこにいたのは、青いレザースーツに身を包み、金髪と青い目が特徴的な宇宙人だった。

「お、お前は！ マグマ星人！」

その姿を見て、セブンが真っ先に反応した。

そう、そこにいたのは、かつて戦ったことのある敵……マグマ星人であったのだ。

第5話 鋼鉄將軍の復讐（後書き）

アイアロン、そしてまさかのマグマ星人登場！

なんでマグマ星人にしたかという点、ウルトラマンナイスとの番組
やショーでのギャグのイメージからですw

ちよっとキャラが変わってますが、大丈夫でしょうか？

第6話 新手のお笑いコンビ？

「あー……これはこれはウルトラ戦士の皆さん、どうしました？」

わざととぼけて見せるマグマ星人。

「とぼけるな！ お前は今、アイアロンの名前を呼んだな。ということ、アイアロンの仲間になったのか？」

「ギクウツ！」

セブンの言葉に、あからさまなりアクションを見せるマグマ星人。慌ててアイアロンに駆け寄り、

「だんな、こりやまずいですよ！ 早く逃げましょう！」

だがアイアロンは、

「うるせえ！」

と一喝すると、マグマ星人を撥ね退けた。

「大体なあ、お前のナビが悪いから、こんな星の引力に引き寄せられちまったんだよ！ だが、そのおかげで俺はこいつらに巡り会えたわけだ。これは滅多にないチャンスじゃあねえか」

「そんな事言ってる場合ですかい！？ 相手はヒーロー五人、こっちは悪者二人、勝ち目ないっすよ！」

「なあゝに言っている。「悪」とは敗者の事、「正義」とは勝者の事、負けた奴が『悪』なのだ！」

「何、花京院みたいな事言ってるんですか！ つーかあれではあんた、1番よりナンバー2の奴じゃないですかー！」

おおよそ知っている人にしか分からないような会話を繰り広げるアイアロンとマグマ星人。

その小競り合いはしばらく続いたが、マグマ星人の放った一言によって終止符が打たれた。

「大体ですね、あんたの目的はカイザーベリアル陛下を捜す事でしょうが！」

その言葉を聞いて、アイアロンはハツとした。

「そ、そうだった……俺としたことが、本来の目的を忘れてしまうとは……」

アイアロンは、少しの間うなだれた後、ゼロ達の方を向いて、

「では、この勝負は預けたぞ！」

と言うと、空高く飛んで行った。

「わーっとだんな！ 俺を置いて行かないでくださいよー！」

マグマ星人も、慌てて後を追った。

一方でゼロ達は、アイアロンとマグマ星人のコントのようなやりとりに啞然としていたが、二人が飛び去った後、ハツとして正気に戻

り、一斉に意見が飛び出した。

「そついや、なんでマグマ星人が？」

「それよりも、奴はカイザーベリアルと言っていたぞ！」

「まさか……ベリアルの野郎も生き返ったっていうのか!？」

「アイアロンが復活しているのですから、ありえないことではないでしょう」

「となると、恐らくダークゴーネも……」

それぞれの意見が出揃い、ある最悪の事態が予想された。

「まさか……ベリアルはまたどこかのアナザースペースで……」

「暴虐の限りを尽くしているのかもしれない……」

ゼロとセブンが落ち込む中、ベリアルによる支配を見てきた三人が、怒りを露にして言った。

「そんなこと……好きにさせてたまるかよ!」

「ああ、もうあのような悲劇は、繰り替えさせてはいけない!」

「これ以上、ベリアルの悪行を許してはおけない!」

「グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボット……」

ゼロは、三人とそれぞれ顔を合わせ、頷き合つと、意を決してセブ
ンに言った。

「決めたぜ、親父。俺は仲間と共に行く」

「お前なら、そう言うと思っていたぞ。だが、それを独断で決める
は出来ない。一度光の国へ帰ろう。まだベリアルがどこにいるのか
も分からないのだからな」

「ああ……そうだな」

そして五人は光の国へと向かった。
果たして、彼らを待ち受けるものは何か……。

第6話 新手のお笑いコンビ？（後書き）

ちよつと今回は『ジヨジヨの奇妙な冒険』を知らない人には分からないネタがありましたね；

今後もこついったネタは出てくると思いますので、ご了承ください。

第7話 新たなる冒険の旅へ

光の国へと戻ったゼロ達は、ウルトラの父に先ほどの事を報告した。すると、ウルトラの父は、

「なんだと？ それが本当なら、最悪の事態だ……」

「どういことですか？ 父さん」

「実はお前達が来る少し前に、エースから報告があったのだ。怪獣墓場に謎のワームホールが発生していた、とな」

「怪獣墓場に？」

それを聞いてセブンは、ゼロと顔を見合わせた。

ゼロも、セブンの考えている事と予想し、深く頷いた。

何故ならそこは、以前ウルトラマンベリアルが『ギガバトルナイザー』を使い、眠っていた百体の怪獣を蘇らせた場所であったからだ。その時は、ゼロや他のウルトラ戦士の活躍により、ベリアルの野望を阻止することができたが、それでもまだベリアルは生きており、別の宇宙でカイザーベリアルとなって猛威を振るい始めたのだ。

しかしそれも、ウルティメイトフォースゼロの活躍によって、再びベリアルの野望は打ち砕かれたのだった。

そして、現在に至る……。

「恐らく、ベリアル達の魂も怪獣墓場へと運ばれていて、何らかの作用によって蘇り、そしてワームホールを開きどこか別の時空へと行ったのだろう」

セブンが自分の予想を話すと、全員が小さく唸った。

「だとすると、なんでまたアイアロンはこっちの宇宙を？」

ゼロが素朴な疑問を口にした。

すると、その疑問にセブンが答えた。？

「それはよく分からないが、アイアロンにも何か理由があるのだろう。それよりも今は……」

「ああ、わかってる。怪獣墓場にできたワームホールの事が先だったな」

「ワームホールには今、エースとタロウを調査に向かわせている。お前達もすぐに向かってくれ」

ウルトラの父がそう言うつと、皆頷き、全員を代表してセブンが言った。

「では父さん、行ってまいります」

「うむ」

そして、ウルトラセブンとウルティメイトフォースゼロの仲間達は、怪獣墓場へ向けて飛び立った。

怪獣墓場へは、グレイブゲートと呼ばれる不思議なオブジェからのみ出入りが可能だ。

今、そのグレイブゲートから、五つの光が怪獣墓場へとやって来た。ウルティメイトフォースゼロの四人に、ウルトラセブンを加えた五人だ。

「おー……。確かに墓場ってだけはあるな。すげー不気味な雰囲気だ」

グレンファイヤーは、柄にもなく寒気がしていた。

怪獣墓場の内部は暗く、辺りは黒い岩山ばかりである。

その中をひたすら飛んで行くと、二人のウルトラ戦士の姿が見えた。

「エース、タロウ！」

セブンがそう叫ぶと、その声を聞いた二人のウルトラ戦士は振り返った。

右側に立っているのは、古代ローマ時代の兵士の兜のような頭部をしたウルトラ戦士、『ウルトラマンエース』だ。

その隣に立つのは、赤いボディと頭部に生えた二本の角が特徴的なウルトラ戦士、『ウルトラマンタロウ』である。

五人が二人の前に降り立つと、待ちかねたようにタロウが、

「待ってましたよ、セブン兄さん。例のワームホールとは、あれです」

と言って、怪獣墓場の上空を指差した。

そこには、紫色の煙のようなものが渦巻く、巨大なワームホールがあった。

「あれが……」

セブンが気を取られていると、今度はエースが、

「どうやら、つい最近できたものようです」

と言い、セブンの気をこつちへと引き戻した。

「あれがどんな理由で発生したのか？ どこへ繋がっているのか？
それは不明ですが、どこか別の宇宙……というより、別の『次元』
に繋がっているようです」

「別の次元？」

セブンは、エースの言葉に引つ掛かるものを感じた。

別の『宇宙』ならまだしも、別の『次元』とは一体どういうことなのか？

そんな疑問に、エースは説明を始めた。

「どうやら、この先に広がっている空間を構成する物質は、普通とは明らかに違うもののようなんです。まだ確証はありませんが、恐らくは別の宇宙などではなく、次元そのものが違う所へと繋がっているのではないかと思うのです」

その説明を聞いたセブンは、腕を組んで「うーむ」と唸った。

続けてエースは、

「一番良い方法は、あの中に入っていく中を調べて来ることなんです
すが、ワームホールの内部が非常に不安定であるため、うかつに飛び込むのは危険かと……」

そう言って、自身も俯いた。

そんな中、一人が威勢よく言い放った。

「なら俺が行く。行かせてくれ！」

「ゼロ!？」

ゼロの突然の発言に、セブン達三人は驚いた。

「奴は……ベリアルは、この先の世界にいるんだ！ ならばそこも、ベリアルによって支配されるに違いない……。だから、迷っている暇があつたら早く行くべきなんだ！」

「ゼロ、その気持ちは分かるが……」

タロウがゼロをたしなめようとしたその時……

「……いや、ゼロの言う通りだ。ここはゼロに任せよう」

「「兄さん!？」」

エースとタロウは、セブンから出た言葉に口を揃えて驚いた。

まさか父親のセブンが止めないとは予想外だったのだろう。

自分の息子が心配ではないのか？ そうも思いかけた時、セブンは、自らの想いを語り出した。

「私はゼロを信じている。ゼロは、今までの冒険を通して強く成長してきた。身体的にも、精神的にもだ。それに……」

セブンは、ゼロの仲間達の方を向いた。

「ゼロには仲間がいる。共に戦う心強い仲間がな……」

「しかし……」

なおも心配そうな様子を見せるタロウ。

それにセブンは、

「父さんには私が話しておく。だから、ゼロに任せてやってくれ」

と、必死に頼み込んだ。

エースとタロウは戸惑ったが、しばらくするとお互いに顔を見合わせて頷き、セブンに言った。

「わかりました。セブン兄さんがそう言うのなら……」

「そうか、二人共、ありがとう。ではゼロ」

「ああ！」

ゼロは、仲間達の方を向くと、確認するように言った。

「じゃあ行くぜ！ お前ら、ついてきてくれるか？」

「当たり前だ！」

「はい！」

「当然だとも！」

ウルティメイトフォースゼロの仲間達は、それぞれ威勢良く返事を

し、意気込みを見せた。

「よし、行くぜ！」

ウルトラマンゼロ、グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットの四人は、未知のワームホールへ向けて飛び立っていった。

「頼んだぞ、ゼロ……！」

暗雲渦巻くワームホールへと消えていく息子に、セブンは届かぬ言葉を送った。

第7話 新たなる冒険の旅へ（後書き）

遅くなつてすみません；

次回からはようやくDOG DAYSの世界に突入です。

お楽しみに！

第8話 もう一人の『勇者』

ゼロ達は、注意深くワームホールの内部を進んでいた。

ワームホールの中は、紫色の曇の渦が起きていて、常に特殊な稲妻がほとばしっているため、下手をすれば自分達が巻き込まれる恐れがあった。

「グッ、こいつは結構ヤバいな」

自分達に飛んでくる稲妻をかわしながら、グレンファイヤーが愚痴をこぼす。

「みんな気をつけろ、一発でも当たれば、分解されてしまうぞ」

稲妻の成分を分析したジャンボットが、皆に呼びかけた。

「ああ、この向こうにベリアルがいるんだ。ここで諦めるわけには……うおっ!？」

ゼロが言いかけたその時、突然ワームホールに歪みが生じた。

辺りの景色がグニヤリと歪み、その直後、今度は空間に謎の“回転”が巻き起こった。

「うおおおっく！ な、何だこれは!？」

ゼロが驚いてそう言うと同時に、全員がその回転に巻き込まれていった。

「うおおおおあああああ!?!」

「くっ！ おおおおおお！？」

「ググググ……………！！！」

まずグレンファイヤーが巻き込まれ、その次にミラーナイトとジャンボットも同じように空間の回転に巻き込まれていった。

「グレン！ ミラーナイト！ ジャンボットー！！！」

ゼロは、歪みの回転によって離れていく仲間達に手を伸ばして叫んだ。

当然届くはずもない。それでもゼロは、仲間を想う気持ちから自然とそのような行動をとっていたのだ。

しかし、ゼロも同じく、空間の歪みによって発生した回転に巻き込まれてしまっていた。

「うわああああああ！！！」

そして、回転に巻き込まれていく中で、ゼロは目の前が眩い光に包まれていくのを感じていった。

その頃、フロニヤルドのグラナ天空武闘台では、シンクとカイザーベリアル、エクレールとレオンミシエリが、それぞれ死闘を繰り広げていた。

「はあああああああ！！！」

「ウエエエアアアアア！」

シンクとベリアルは、互いに叫びを上げながら攻めていった。シンクの持つ白い棒と、ベリアルの赤く鋭い爪がぶつかり合い火花を散らす。

「へへへ、やるなア。今ならあんまり痛くないところからウィルスを注入して部下にしてやってもいいが、どうだ？」

「悪いけど、そいつはお断りだね！」

軽く会話を交わした後、両者は再びぶつかっていった。その近くでは、エクレールがレオンミシエリと戦いながら、その心へ向けて必死の呼びかけをしていた。

「レオ様！ 目を……覚ましてください！」

レオの攻撃を受け止めつつ、エクレールは必死に叫ぶが、レオにその声は届かない。

それに、レオの武器であるグランヴェールは大斧であるため、エクレールの持つ短い刀身の双剣などではとても受け止め続けられるものではなかった。？

「ヴオアアアアアアアアア！」

レオは、普段のレオとはかけ離れた獣のような雄叫びを上げ、グランヴェールを持つ手にさらに力を入れた。さすがにエクレールも、体力に限界が近づいてきていたために膝をついた。

それでも、なんとかグランヴェールの刃は受け止めている。

(クツ、このままではまずい……。だが、勇者のためにも、ここは私が耐えなくては！)

シンクとエクレは、レオはベリアルによって操られてると考えた。そのためにエクレールは、シンクがベリアルと戦っている間レオの相手をして一対一の状況にし、シンクがベリアルを倒すまでの時間稼ぎをしようとしていたのだ。

「ククク、あっちのお嬢さんはもう限界みたいだぞ？」

「くう……エクレ……」

ベリアルはシンクと戦いながらも余裕を見せる。

一方でシンクは、ベリアルと互角の勝負を繰り広げてきたが、こちらでもエクレールと同様、体力が限界に近づきつつあった。

「ミルヒひい様……」

「わかってはいます、このままでは……」

その遠くでは、ミルヒとルージュがシンク達の戦いを心配そうに見守っていた。

今はフロニヤ力が低下している。そのため、今この状況で致命傷を受ければ、本当に死んでしまう危険があるのだ。

「フー……そろそろ飽きたな。おいシンク、終わりにするか？」

「え？」

訳の分からない質問に、シンクは面食らった。その隙について、ベリアルは一気に間合いを詰めてくる。

「ハッ！」

シンクが再度構えた時には、すでにベリアルの爪が、シンクの胸に突き刺さるうとしていた。

その時シンクは、一瞬の閃きでベリアルの腹に蹴りを入れ、それによって同時に間合いも取った。

「うぐおおおっ!?!」

そこは、ちょうど先のレオとの戦いでつけられた傷の位置であったため、ベリアルはそこを押さえてうずくまった。

(これは、もしかして今がチャンス?)

そう思ったシンクは、武器を構えてベリアルに向かっていった。そして、その距離が両者の射程内になった時、

「いけないシンク! 今ベリアルに近づいては!」

とミルヒの叫びが聞こえたため、シンクは慌てて立ち止まった。しかし、結構なスピードを出していたためピタリとは止まれず、勢い余ってこけてベリアルの後方まで飛んでいってしまった。

「チツ、邪魔しやがって。せつかくあいつと同じようにしてやろう
と思っただのによ」

ベリアルが悔しそうに呟く。

シンクの方は、慌てて起き上がり、ベリアルに構えた。

「だが……」

ゆっくりと立ち上がるベリアル。

そして、素早くシンクへと振り返し、右腕を大きく振るった。

シンクは打撃を警戒したが、ベリアルの右腕はシンクにかすりもせず、代わりに何か大きなものが叩きつけられたような衝撃が胸に走った。

「うがつ!?!」

訳も分からず吹き飛ばされるシンク。

突然の事であったために受け身もとれず、シンクの体は背中から石造りの床へと叩きつけられた。

そこへ、ベリアルが歩み寄ってくる。

「これで、結果は同じだな」

不敵に笑いながら、ベリアルが言う。

さらにベリアルは、シンクが逃げられないように、胸を右足で踏みつけた。

「うつつ!」

「クククククク……いいぞ、その顔」

そのままの体勢で、ベリアルは自分の爪をシンクへと向けた。

「お前も、俺の僕にしてやる!」

そう言って、ベリアルは右手を振りかざした。

「シンクーーーーッッッ!!」

ミルヒの悲鳴ともとれる叫びがこだました。その時だった。

ゴオオオオオオ!

何かが、こちらに向かって飛んで来ている音が聞こえてきた。

「んあ?」

それに気付いたベリアルが、その音のする方へと顔を向けると、空の彼方から、赤い光の球体がこちらへと飛んで来るのが見えた。

「あれは……」

ベリアルが何かを察した様子で呟くと同時に、赤い球は向かって来る速度を速め、ベリアルにぶち当たってきた。

「ぐあっ!!」

赤い球に激突したベリアルは、火花を散らして弾かれた。

その後、赤い球は次にエクレールを圧倒しているレオにぶつかっていき、エクレールから引き離れた。

「ヴオオオツ!?!」

獣のような唸り声を上げ、レオは腹這いに倒れた。

「な、何だ？」

エクレールも、突然の出来事に啞然とした。

「グウウウ……まさか、まさか!？」

ベリアルは、怒りをむき出しにして体を震わせた。

赤い光の球は、シンクを庇うように彼の前に降りると、一瞬だけ誰もが見えなくなるような強い光を放ち、そして光が消えた頃には、そこに一人の超人の姿があった。

「久しぶりだな、ベリアル」

そう言って振り返ったその超人は、ベリアルにとって絶対に忘れられない存在でもあった。

自分の野望を二度も潰された、ベリアルの最も憎む光の戦士。

「やはり……やはりお前かア!!」

怒りと憎しみを込めたベリアルの叫びが、周囲に響き渡る。

それを聞いて、いや、たとえ聞かなくなったとしてもそうするつもりだったように、その超人は言い放った。

「そつだ、俺の名は……ゼロ。ウルトラマンゼロだツ!!」

雄々しく名乗りを上げるゼロに、皆はどこかシンクと面影を重ねていた。

第8話 もう一人の『勇者』（後書き）

ようやく完成しました。ふー焦った；

え？ 他のウルティメイトフォースゼロのみんなはどうしたかって？
それは今後の話で！

では次回もお楽しみに！

第9話 二人の勇者（前書き）

お待たせしました…ようやく続きが出来ました。

これからもこんな亀更新になりそうですが、そこはご了承ください

m (—) m

「うん、なんとか……。それよりも、彼は……」

「どうやら敵ではないようだが、まだ謎が多過ぎる。とにかく今は、安全な所まで退がるぞ」

そう言うとエクレールは、シンクの手を取り立ち上がらせた。

「あっ！ エクレ、危ない！」

シンクは立ち上がると同時に、エクレールに迫る危機を察知して素早く身を引き寄せた。

その瞬間、二人の横を大斧の刃が鈍く風を切りながら通っていった。その先には、目を赤く発光させた、獣の如き唸りを発しているレオの姿があった。

「おい！ そいつらの相手は後にしろ、今はこっちだ！」

ベリアルルの声を聞いて、レオは目標を変え、ウルトラマンゼロの背後に回り込んだ。

「ヘッ、挟み撃ちとはまた卑怯なマネしやがるな」

「うるせえ！ お前だけは、なんとかしてでも倒さなくてはならないからな。どんな手を使ってでも、俺はお前に勝つ！！」

そう言ったベリアルルの右の掌には、赤黒い光の球体が発生していた。

「ハッ！ お前、まさか！？」

「そうだ、これからデスシウム光線を撃つ。今のお前にはこいつを

避けることも出来るが、そうになると、お前の後にいるそいつ、俺に
“操られているだけ”のそいつに当たることになるぞ?」

ベリアルは、さぞ嬉しそうに笑う。

「クツ……ベリアルてめえ!」

「フツ、他にも手はあるぞ。そいつの命を救いたければ、この攻撃
を防いでみるんだな。ただ、その場合は後ろからそいつに襲われる
だろうな。もしくはそいつを押さえ込む方法もあるが、そうなれば
俺の手で殺られることになる……いずれにせよ、お前に勝ち目は無
いってことだ」

そこまで聞いて、ゼロは肩の力を抜いて俯いた。
全てを諦めてしまったのだろうか?

いや、そうではなかった。

「……ベリアル、他にもまだ方法はあるぜ」

「ほう、どんな方法だ?」

「それは……」

次の瞬間、ゼロはベリアルに向かって猛スピードで駆け出していた。

「それはお前を倒して、発射を止めさせる事だ!」

ゼロスラッガーを構え、ベリアルへ向け一直線に走る。

だがその時、背後から迫るものを感じ、ゼロは後ろを振り返った。

その瞬間、光る何かがゼロの左肩をかすめた。

「ッ!？」

それは、ただかすった程度だったが、それだけで激痛が走った。

驚いてゼロが何かが飛んできた方を見ると、そこには自分に目掛けて弓を構えたレオが立っていた。

レオはどこから弓を取り出したのか？ 実はグランヴェールもまた宝剣であるため、大斧から形状を自在に変えることが出来るのだ。今のレオはベリアルに操られているため、ゼロがベリアルに迫っていくのを見て、弓に変えたグランヴェールでゼロを狙って矢を放ったのである。

「ククク……残念だったな！」

その様子を見ていたベリアルは、嬉しそうに笑うと腕を十時に組んだ。

ゼロが走って迫ったために、二人の距離はわずか1メートルほどになっていた。今デスシウム光線を撃たれば、確実に光線はゼロを直撃するに違いない。

「これで終わりだ！ ウルトラマンゼロオツ!!」

そして、デスシウム光線が放たれようとしたその時だった。

ドゴスッ!

「ゲオツ!？」

ベリアルは背後から強い衝撃を受けた。

それによってベリアルはバランスを崩して前のめりの姿勢になり、

溜まっていたエネルギーも辺りに四散してしまった。

「グッ……誰だ!？」

ベリアルが後ろを向くと、まず目についたのは、風に揺れる白いマントだった。

そしてそのマントが揺れる先には、長い棒を手に持った金髪の勇者の姿が。

「クッ！ お前か！」

邪魔をした相手がシンクだと分かると、ベリアルは更なる怒りを覚えた。

「お前もゼロに声が似てるからな、お前も……この場で死ぬッ！」

ベリアルが右手を振り上げる。

すると、またしても背後から打撃を受け邪魔された。

「ベリアル！ まだ俺との決着はついてないぜ！」

今度はゼロが、ベリアルの背後から回し蹴りを放ったのだ。

「ええい！ いちいち気に触る連中だッ！」

ベリアルは、シンクとゼロの両方を近づけさせないように、とにかく両手を振り回して暴れまくった。

さらにベリアルウィルスによって操られているレオも加わり、それに追いやられるようにしてゼロとシンクは背中合わせになった。

「クツ、こいつはきついな……ところでお前、名前はなんていうんだ？」

この状況になって、ゼロは始めてシンクに話し掛けた。

「え？ 僕の名前はシンク・イズミ。このフロニヤルドには勇者として呼ばれたんだ」

突然の質問に戸惑いつつも、シンクはゼロに答えた。

「そうか。じゃあ俺も名乗っておかないとな……」

「大丈夫だよ。ウルトラマンゼロでしょ？ さっき名乗ったから分かってるよ」

優しく言うシンクに、ゼロは少し照れた様子で、

「あ……そうだったか？ それじゃあいこうぜ、シンク！」

「うん！」

会話を交わすことによって少し気分が落ち着いたのか、二人は目の間に立つベリアルとレオに決意を固めた様子で構えた。

「フン、二対二になったところで、俺達に勝てるとは限らんぞ」

余裕を見せてベリアルが言う。

そこへ、

「いや、三対二だ！」

エクレールが強い口調で叫んだ。
気付けば、ベリアルとレオは前をシンクとゼロに、後方をエクレールに挟まれる形になっていた。

「どうだベリアル、これでもまだ余裕でいられるかな？」

「う……うるせえッ！ 殺れるもんならやってみる！」

ゼロに言われて、ベリアルはムキになって答えた。

そして、それぞれが一斉に飛び出そうとしたその時……

ギュオン！ ギュオン！ ギュオン！

天空より赤い三本の光線が、それぞれゼロ、シンク、エクレーの足下に落ち、行動を妨害した。

「クッ！ 今度は何だ！？」

上を見上げたゼロの目についたのは、上空から降りて来る人型の影だった。

基本的には人型だが、全体的に特徴的な装甲を身にまとい、顔や胸には赤い発光体があった。

「や、奴は……！！」

「……ダークゴーネか」

ゼロは驚愕の、ベリアルは喜びの眩きを漏らし、空より降りて来る者を見つめていた。

「捜しましたよ、陛下」

そう言った彼の名は、ベリアル軍の暗黒参謀
ダークゴーネである。

第10話 暗黒参謀復活

ダークゴーネは、ゼロ達からベリアルを庇うように武闘台の上に降り立つと、ベリアルに向き直った。

「おお……陛下……」

傷だらけのベリアルを見て、ダークゴーネは嘆いた。

「なんとということでしょう……陛下がこれほどまで傷を負うとは……。私が、もっと急いで来ていれば……！」

「おい、くだらねえこと言ってねえで、早くなんとかしろ」

激しく自分を責めるダークゴーネに、ベリアルは苛立ちながら言った。

途端にダークゴーネはハツとして、ベリアルを立ち上がらせるために手を貸した。

「そうですね、ひとまずはこの場を離れましょう。すでに迎えを用意してありますので」

そうダークゴーネが言うと、ゼロが、

「おいおい、この場を離れるったって、俺達に囲まれたこの状況でどうやって離れるっていうんだ？」

と言い、ゼロスラッガーの刃先を向けた。

同時に、シンクとエクレの武器を持つ手にも力がこもる。

確かに今ダークゴーネ達が置かれている状況は、前と後ろを挟まれ、さらにベリアルもかなりの傷を負っているために戦えず、そのベリアルを守りながらとなると、戦うにせよ逃げるにせよ至難の業であるに違いなかった。

それでもダークゴーネは、せせら笑って言った。

「ホホホ……勇猛な方々ですね」

その時、辺りが急に暗くなった。

元から曇天のため薄暗いが、それとは別の、何か大きなものが上を覆っているような感じだった。

「な、何だ……あれは!？」

ゼロが上を見上げると、そこには巨大な『円盤』があった。

全面銀色で、いくつかのカラフルな電飾がついているだけの地味なデザインだったが、非常に巨大で、見上げている空を一面覆いつくしているほどの大きさであった。

これほどの大きさのものが、どうやって誰にも気付かれずに突然真上に現れたのか、それが不思議だった。

「来ましたね。では陛下、参りましょう」

ダークゴーネには何か分かるらしく、ベリアルを立ち上がらせるとそう言った。

「ああ？」

ベリアルは、ダークゴーネの言葉の意味がよく分からず、首を傾げてみせた。

「おっと、陛下にはまだ言っていないませんでしたね。あれは私が陛下を捜すために様々な宇宙人達に協力を頼み、共に完成させた宇宙船【ライトオーバー】です」

ダークゴーネは誇らしげに言ったが、ベリアルは不満そうだ。

「お前な……」

「は？」

「どうせ造るならよ、何でもっと派手にしなかった！」

そこに怒るか、とダークゴーネは拍子抜けしたがすぐに、

「いえいえ陛下、あまり見た目にこだわりすぎると逆に不便なものになってしまいますよ。空気抵抗や摩擦力など、あらゆる問題をクリアするには逆にシンプルな方が良く、我々は導き出したのですよ」

と言い、うまくベリアルを言いくるめた。

そして上を見上げて右手をさっと挙げると、巨大円盤ライトオーバーの中心部からスポットライトのような光線がダークゴーネ達に降り注ぎ、瞬時にベリアルとダークゴーネを内部へと取り込んだ。

「なっ!？」

それに驚いたゼロは、急いで円盤へ飛んでいこうとしたが、その途端に円盤のカラフルな電飾から次々とその色に準じた光線が放たれ、ゼロを近付けさせなかった。

「ホホホホ……」

ライトオーバーから、ダークゴーネの音が響く。

「無駄ですよ。このライトオーバー、見た目はシンプルでもあらゆる星の技術が結集しているため高い戦闘能力を誇る要塞となっているのですよ」

「クツ……」

ゼロは悔しさを押さえ拳を強く握った。

「今回は見逃してあげましょう。ですが、次こそは必ず決着をつけさせてもらいますよ、ウルトラマンゼロ！」

その言葉と共に、ライトオーバーはその巨大な機体からは想像もつかないほどのスピードで空の彼方へと飛び去って行った。

ライトオーバーという名前の通り、本当に光の速さを超えての飛行が可能らしい。

「……………」

飛び去って行ったライトオーバーが先程まであった場所を、ゼロは呆然と眺めていた。

だが、すぐにそうもしてられないことを感じた。背後から強い殺気を感じ取ったのだ。

「ゼロ！」

シンクが叫ぶのとほぼ同時に、ゼロは後ろを振り返り、ゼロスラッガーをクロスして攻撃を受け止めた。

ガキッ！

と、刃同士がぶつかり合い火花を散らす。

攻撃を仕掛けてきた相手は、ベリアルウイルスによって未だ操られているレオンミシエリであった。

恐ろしい唸りを上げながら大斧のグランヴェールに力を込め、ゼロスラッガーをクロスさせてのガードを打ち破らんとしている。

「こいつも、ミラーナイトの時と同じだ。ベリアルの闇に侵されている……それならッ！」

ゼロはクロスさせたゼロスラッガーで思い切りグランヴェールを押し返し、レオをひるませると素早く背後に回り込み、羽交い締めにした。

「お前の闇も、俺の光で浄化してやる！」

すると、ゼロの体が光り出し、徐々に輝きを増していった。

第10話 暗黒参謀復活（後書き）

どうでしたかね？ ライトオーバー…本当はベリアル軍の新要塞となるため凝ったものによろと思うたのですが…最終的に普通のUFOみたいになりました（^ー^；）

まあそこはダークゴーンの言うように、シンプルイズベストということ…

しかし、話があまり進んでいかない…できればウルトラマンサーガが始まる前に完結させたいものですが…

第11話 獅子よ目覚めよ！

目の前に広がるのは、闇……。
光の差さない、無明の闇……。
その中に彼女は居る。

特に何かをしようともせず、ただその暗闇の中に浮かんでいるような状態で、体には触手のように『闇』が絡みついている。

ここは彼女 レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワの精神の世界である。

カイザーベリアルにベリアルウイルスを注入され、彼女の意識はこの暗闇の世界へと押し流されてしまったのだ。

儂は……何も守れないのか……。

ベリアルと戦い敗北したことで、ミルヒ達を守れなかったと思い込み彼女は、すっかり意気消沈してしまっていた。

ベリアルの闇に侵食されていることもあって、気力をなくしたレオンミシエリの意識は、もはや闇の中へ消え去ろうとしていた。

そこへ、ボツと、光り輝く何かが、この空間へと侵入してきた。

それは『手』であった。

白く強い光を放つ二の腕までの右手が、周りの闇を打ち消しながら、レオのところへと向かって来る。

一見すれば恐ろしくも思えるが、光り輝くその手は不思議と恐怖を感じさせず、むしろ見ているだけで心が和むものであった。

儂を……呼んでいるのか？

自分へと伸びるその手に、レオ自身も手を伸ばすと、彼女に絡みつ

いていた闇は次々と千切れていく。
そして、レオの手と光り輝く手が重なり合った時、そこから太陽の如き輝きが、この空間全体に放たれた。

「ハッ！」

目を覚ましたレオン・ミシエリ、勢いよく飛び起きると、目の前には驚いた表情のミルヒがいた。

どうやらレオが突然起き上がった事に驚いたようだが、すぐにその顔は明るくなり、後ろを向いて皆に知らせるために叫んだ。

「レオ様が目を覚ました！」

その声を聞いて、ドタドタと足音を立てて、一人の少年が前に出てきた。

髪と瞳の色や、猫科の耳、そして顔つきなど、まるでレオが短髪で男になったようなほどレオによく似た少年だ。

彼の名はガウル・ガレット・デ・ロワ。レオン・ミシエリの弟である。

「姉上！ 心配しましたよー！！」

ガウルがレオに抱きつこうとするが、あっさりと顔面を押さえつけられて阻止された。

「うぐ……あ、姉上、何を……」

「ああすまん、つい条件反射だな」

その後は、シンクやエクレールと、見知った顔が前に出てきたが、一人だけ見知らぬ人物がいた。

銀色の顔で目が黄色く、身体が赤と青の色の超人的な人物だ。

レオが警戒して見ていると、その人物はハツとして、

「おっと、あんた自身には初めて会ったな。自己紹介させてもらうと、俺の名はウルトラマンゼロ、光の国からやって来たウルトラ戦士だ」

「ウ、ウルトラ……?」

聞き慣れぬ単語にレオが戸惑っていると、横からミルヒが、

「まあまあ、細かい話は私の方から」

と言って、これまでの経緯を話しはじめた。

全てを聞き終えたレオは、わずかな沈黙の後、ゼロに言った。

「……なるほど、事情は判った。それで、あのベリアルとやらはまた現れるのか?」

「ああ、間違いないだろうな。ベリアルは支配すると決めたら必ず自分のものにする。以前もそうやって、数多くの星を征服してきたからな……」

ゼロの声が悲しげなった。

「あいつも元々は、俺達と同じ正義のために戦うウルトラマンだったんだ。だがあいつは、力を求め続けた末、レイブラッド星人の邪悪な魂によって今のようになってしまった……だから………
ああっ！！！」

突然思い出したように叫ぶゼロ。

話し口が暗くなってからの急な大声だったため、全員が驚いて肩をビクツと震わせた。
続けてゼロは言う。

「俺の他にも、この世界にやって来た仲間達がいるんだが……知らないか？」

今までのことを思い出しているうちに、脳裏にウルティメイトフォースゼロの仲間達の姿が浮かんだのだ。
とはいえ、ここに居る者のほとんどが、先ほどベリアルと戦った時に居合わせた面々であるため、知るはずもなかった。
ゼロがそれに気付き、うなだれているとシンクが、

「大丈夫だよゼロ、きっとこのフロニヤルドの何処かに来てるはずだから……。それに、よければ僕達も一緒に捜すよ」

と言って、ゼロの肩に優しく手を置いた。

「シンク……」

ゼロが顔を上げると、シンクはニコツと笑い、ミルヒ達の方を向いて言った。

「いいですよ、姫様？」

「はい！ ゼロさんは私達の命の恩人ですからね、協力は惜しみませんよ！」

ミルヒがそう言うと、レオも、

「そうじゃな……借りは返しておかねばな。なあガウル？」

「おう！ ジエノワーズの奴らにも手伝わせますよ！」

ガウルも笑顔で答える。

「みんな……ありがとう」

それぞれの言葉を聞いて、ゼロはこの人々の心の暖かさに感激し、声が震えていた。

第11話 獅子よ目覚めよ！（後書き）

どうも！ なんとか今月中に投稿することができました…正直、焦った^^；

なので、後半はぶっちゃけやつつけです（冷汗）

あと感想の方で「この作品ではゼロは人間体に変身しますか？」という質問があったのですが、一応これではウルトラマンのままでいきたいと思っています…人間体を期待してた皆さん、すみません；

第12話 再会と困惑と……

翌日、ゼロはシンクにビスコッティの城下町を案内してもらった。
とになった。

「おー、かなり賑わってるな」

「でしょ？ そつえば僕も、最初はエクレにこうやって案内してもらったっけ……」

自分がまだこの世界に来たばかりの事を懐かしむシンク。

ちなみにゼロは、昨夜のうちにこの世界についてをシンクから教わっていた。

このフロニヤルドでは【フロニヤカ】と呼ばれる特殊な力があって、その力が働いている土地ではたとえどんな怪我をしても死なないという。

そのため、この世界での戦は、死傷者が出ない安全なものなのだ。

最初その説明を聞いたゼロは「なんだそりゃあ!？」と口にしたが、よく考えてみれば、これほど平和な世界が存在するのかと嬉しく思った。

それと同時に、ベリアルに対する怒りもこみ上げてきた。

(ベリアルがこの世界にきた以上、奴は必ずここも自分のものにしてやろうとするに違いない。そうならば……)

「……ゼロ？ ゼロどうしたの？」

ゼロが真剣に考え込んでいるのを見て、シンクが心配して顔を覗

き込んできた。

「あ……ああ悪い、ちょっと考え事があったな……」

「お？ シンクにウルトラマンゼロじゃねえか？」

前方から聞こえた声に二人が視線を移すと、そこにはガウルと『四人組』の姿があった。

「ガウル！ それにジェノワーズの……あれ？ 四人？」

シンクは疑問に思った。

ジェノワーズは確か三人組であるはずなので、四人いるのは何かおかしいと。

ジェノワーズのメンバーは、虎の特徴を持つ少女ジョーヌ。兎の特徴のある少女ベール。そして黒猫の少女ノワールの三人である。その他に一人、シンクには見知らぬ顔があったのだ。

「ああ、なんでもこいつらが最近知り合ったみたいで……」

ガウルがそう言いながら、その人物の方を見ると、途端にその人物は恥ずかしいのか、他の三人の後ろに隠れてしまった。

「ど、どないしたん？ 具合悪いんか？」

「それとも、どこか怪我しましたか？」

「……………大丈夫？」

急に隠れたその人物に、ジェノワーズの三人が声を掛けていく。

三人が目線を低くしているのを見ると、おそらくはしゃがんでい
るか何かして、体制を低くしているのだろうか。

「今のは、まさか……いや、だが………」

隠れる一瞬、ゼロはその顔を見た。それまでそちらに注目してい
なかったため、その一瞬しか見れなかったが、それでもハッキリと
顔は認識できた。

だがまだ確証が無いため、

「なあ、そいつとはどこで知り合ったんだ？」

とりあえず質問をして、絶対の確信を得ようとしてみた。

「つい昨日、戦場から引き上げる際に出会ったんです」

その質問にはベールが答えた。

「昨日……」

ゼロは自分の予想がほぼ当たっている気がしてきた。

「……傷だらけだったから、連れて帰ったの」

「なるほど……」

続くノワールの言葉に、ゼロは確信を得つつあった。

「ほんでな、名前はミラーなんとかかゆうてたかな？」

「……………」

最後にジョーヌの言葉を聞いた瞬間、ゼロは黙ってジェノワーズの三人の間をかき分け、三人の後ろに隠れた人物をガツチリと両手で捕らえ、そのまま立ち上がらせた。

「ミラーナイト……………だよね？」

ゼロは啞然とした。

そこにいたのは、自分のよく知っている仲間、ミラーナイトであったのだが、その頭には何故かピンク色の可愛らしいリボンがつけられてあったのだ。

一方で、ダークゴーネが他の宇宙人達と共に造り上げた新しい戦闘要塞『ライトオーバー』によってひとまず宇宙へと退散したベリアルは。

「……………」

今ベリアルの見ている景色は、緑色で支配されていた。

ここはライトオーバーの内部にあるメディカルスペース。

この中にある治療カプセルの一つに、ベリアルは緑色の液体に満たされて入っていた。

すでにレオンミシエリによってつけられた傷は消え、体力も十分に回復して、手足も自由に動かせるようになっていた。

「いかがでしょう陛下？」

緑の世界の中に、ダークゴーネの姿がぼんやりと見えた。

「ああ、だいぶ良くなったようだ」

ベリアルは右手を上げて答える。

「では、リキッドを抜きます。足元にお気をつけて……」

その2秒ほど後、ゴボツ！ という音と共に、ベリアルを満たしていた緑色の液体が足元から抜けていった。

だんだん液体の水位は下がっていき、ベリアルの視界が晴れたかと思うと、もう液体はベリアルの胸元まで減り、さらに足元までになり、液体の中に浮かんでいる状態だったベリアルはよるけそうになったが、先にダークゴーネから言われていたので両足に力を込めて難なく体制を保った。

液体が完全に抜けると、カプセル内部に暖かな風が吹き、ベリアルの濡れた体を瞬時に乾かした。

そしてカプセルの扉が開き、ベリアルがカプセルから出ると、まず顔の右目の辺りを触ってみた。

しかし、そこにはまだ、以前ウルトラマンゼロによってつけられた傷の感触があった。

「この傷は、消えないのか……」

そう言ったベリアルの声は、どこか悲哀を感じさせるものがあった。

「も、申し訳ありません陛下……。その傷は古く特殊なもので、まだ今の治療カプセルでは……」

ダークゴーネがさぞ申し訳なさそうに言うが、言葉の途中でベリアルが「まあいい」と言って遮った。

「ところでダークゴーネ、お前の他にはこの艦に乗っている奴はいないのか？」

ベリアルの興味はそこに移った。

それにダークゴーネは小さく笑うと、

「それは当然、我々の他にも数名乗っています。それに陛下の部屋もありますので、ついでに案内いたしましょう」

と言い、遠隔操作でこのルームのドアを開けると、その奥に広がる廊下へとベリアルを案内した。

その際、ダークゴーネは思い出したように「これもお忘れなく」とベリアルにあのベリアルマントを渡しておいた。

第12話 再会と困惑と……（後書き）

今回は調子に乗って両サイドの話を同時にやってみました。

ちなみにミラーナイトがなんでああなったのかは次回で一応語りますが……特に深い理由は無いため、あまりつつこまんといってくださいな^^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0991v/>

ウルトラマンゼロ×DOG DAYS 逆襲のカイザーベリアル

2011年11月24日23時47分発行